

てづま 手妻は言葉を超え、世界の人に驚きと楽しさを伝えられる。

江戸時代に栄えた日本のマジック「手妻」に引かれて

—元年度の文化庁芸術祭での新人賞受賞、おめでとうございます！
ありがとうございます。マジックの大会ではアジアチャンピオンや世界5位なども経験しましたが、今回の賞はまた少し違う喜びを感じています。これまで積み重ねてきた自身の手妻というものが、数ある芸能の中で認められたこと。マジックの世界から一歩踏み出したところで評価されたことが、とてもうれしかったです。

—藤山さんのマジック人生は、いつどのようにして始まったのですか？
子どもの頃から面白いのが好きで、マジックに本格的に興味を持ったのは15歳の時。テレビで見たマジックにくぎ付けになり、翌日にはトランプを買いに走りました。高校生で社会人サークルに入り、大学ではマジックサークルに入部しました。その頃やっていたのはいわゆる西洋マジックです。

—西洋マジックに取り組む中で、手妻のことも知ったのですか？
手妻との最初の出会いは、後の師匠となる手妻師・藤山新太郎があるイベントの講演に来たことです。手妻は簡単に言えば「日本のマジック」であり、伝統芸能の一つ。300年ほど前の文献にはすでにその存在が登場していて、最も文運隆盛だったのが江戸時代。昭和初期には衰退してしまっていたのですが、そこから文化復興に尽力した1人が藤山新太郎でした。たまたま僕の自宅と師匠の事務所が近所で、度々おじゃまさせてもらうようになり、次第に仕事を手伝うようになりました。

—新太郎さんの仕事を見ながら、藤山さんも手妻に引かれていったのですか？
最初から手妻に夢中だったわけではなく、大学卒業後にプロを目指して師匠に弟子入りした時もまだ手妻一筋とは考えていませんでした。でもある時、名古屋の呉服座という歴史ある芝居小屋で師匠の手妻の公演を見たら、その光景がすごくて。現代にありながらまったく違う時代が見えたんです。こんなにも違う世界を表現できるのかと圧倒されました。修行中は和洋いずれのマジックも習い、師匠にも両方やることを勧められたのですが、やっていく中で「自分は手妻だ」と心が決まり、途中から手妻一本に絞りました。大好きなマジックで、母国の文化を多分に含んでいて、言葉を超え世界中の人を楽しませられるものがある。手妻がそれだと気付いた時、僕はとてもうれしかったです。

—今の時代にも楽しめる、和風ではない本物の「和」を届けたい
—修行時代には、どんな思い出が残っていますか？
思い出の半分は叱られた思い出です(笑)。今思えば当然ですね。大学生が初めて社会に出て、ましてやプロのマジシャンという特殊な世界。



▲「FISM ASIA」大会で部門優勝(平成26年)

電話の受け方から話し方、立ち居振る舞い……本当によく叱られ、指導されました。そういった一つ一つの教えと、師匠の姿を間近で見ることが、プロになるための基本を学んでいきました。

—厳しい世界での修行に、辞めたいと思うこともありましたが？
手妻が好きなので苦ではなかったのですが、確かにつらいと思う時もありました。でも、あきらめるのが嫌だった。好きなことなのに続かなかつたら、この先何をやってもどんな仕事にしても続かないのではないかと。今ここでマジックの修行をやり遂げることは、今後自分が生きていくために必要なことではないか。そんな思いで約4年間頑張りました。

—独立して7年。手妻師として大切にしていることは何ですか？
一つ挙げるなら「時流に合わせていくこと」でしょうか。手妻は、伝統の演目は文献に山ほど載っていますが、その中でエンターテインメントとして今楽しめるものがどれだけあるかと言えば、非常に少ない。ですから、古典をそのままやるのではなく、古典的な要素を据えつつも、時代に合わせていくことがとても重要です。そのあんばいが意外と難しく、現代受けする方に行き過ぎると「和風」になってしまい、伝統芸能の手妻ではなくなってしまいます。日本舞踊の要素や和のしきたりを含む本物の「和」が手妻ですから、そのバランスをうまくつかんで時代に合った手妻をやっていかなければなりません。



▲一瞬で顔が変わる「七変化」

—オリジナルの演目作りにも取り組んでいらっしゃいますね。
先ほどの話に通じますが、現代の人に楽しんでもらえる演目が増えていかなければ、手妻に興味を持つ人も増えていきません。文化を守っていくためには新しい演目を作っていくことも欠かせないと思っています。それは、僕自身がこれから先何十年と手妻師として生き残っていくために必要なことでもあります。

—藤山さんの代表作の一つ「七変化」はどのような作品ですか？
「七変化」はもともとマジックの世界大会に出場するために考案したオリジナル作品です。中国の変面に興味を持ち、「もし300年前に日本の手妻師が変面の技術を持っていたらどんな演目を作るか？」と想像して作りました。一匹のキツネがさまざまなキャラクターに変化しながら人々を驚かせていくのですが、複数のキャラクターを1人で演じるアイデアは日本舞踊の「北州」という踊りがヒントになっています。見終えた時、まるでキツネに化かされたような感覚になってもらえるといいなと思っています。

—後世に手妻を残していくために。故郷・杉並から文化発信
—芸の研さんに力を注ぎ続けるその原動力はどこから来るのですか？
結局のところ、僕自身がエンターテインメントが大好きなんです。



国際交流イベントなどさまざまな場で活躍中

区のイベントでも公演しています



もっと「すごい世界」を見てみたい。頭の中に思い描いたびっくりするような世界を自分で演じたい。そう思うからこそ今以上に芸を磨きたいと力が湧いてきます。あとは、やはりステージをやりきった後の達成感、お客さまに大きな反応をいただいた時の喜びも手妻を続けていく支えになっています。

—藤山さんが手妻師として目指すもの、夢はありますか？
自身が長く続けていきたいと願うと同時に、後世に手妻を残したいとも強く願っています。偶然ではありますが、僕と師匠を、僕と手妻をつないでくれたのは杉並という街でした。杉並は文化的な街ですし、もし誰かが手妻をやってみたいと思えば実現は難しくはないはず。だからこそ故郷であるこの街から文化を発信し、1人でも多くの若い人に手妻と出会ってほしいと思っています。そして手妻を見た若い人に「手妻ってかっこいいな」と感じてもらえるように、僕自身が輝いていなければなりません。自分が活躍し魅力的な作品を残していくことが文化継承につながると信じて、これからも精進していきたいです。

藤山大樹 自主公演

江戸手妻 東京公演2020

●日時：5月22日(金) 午後7時30分～9時
23日(土) 午後1時30分～3時・5時30分～7時
●場所：杉並公会堂(上荻1-23-15)

区民各回32組計192名を招待(抽選)

往復はがき(13面記入例。2名まで連記可)で、5月1日(消印有効)までに「藤山大樹 江戸手妻公演」招待係(〒166-0016成田西4-11-10)

図 藤山大樹 ☎070-5085-3916

詳細・チケット購入については、こちらから▶



新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、中止になる場合があります。

Japanese Traditional Magic

江戸時代から続く日本伝統奇術「手妻」とは？

マジックに「和の所作」「舞踊の要素」を取り入れ、日本独自に発達した芸能のこと。江戸時代に、稲妻のごとく手を素早く動かすことから、そう呼ばれるようになったと言われる。藤山流では、舞台素養を身に付けるため、弟子入りの段階で日本舞踊は必須科目、長唄なども推奨している。

ほかににもたくさん演目があります！

主な演目
藤山さんの代表作「七変化」
「大祝舞セイロ」
「蝶のたはむれ」

YouTubeで配信中！
すぎなみビト MOVIE

手妻を覗いてみよう！
演目の解説や実演を収録しています。
すぎなみビト「藤山大樹さん」のインタビューが動画でも楽しめます。右2次元コードからご覧いただけます。
杉並区公式チャンネル



プロフィール：藤山大樹(ふじやま・たいじゅ)手妻師/日本奇術協会正会員・師範。昭和62年生まれ、杉並区出身。15歳でマジックを始め、法政大学でマジックサークルに所属し腕を磨く。大学卒業後、手妻の大家である藤山新太郎に師事し手妻師の道へ。平成26年にマジックのアジアチャンピオン、27年に世界大会「FISM(フィズム)」で5位。令和元年には文化庁芸術祭「新人賞」を受賞し、日本マジック界歴代最年少受賞という快挙を成し遂げた。